

第十六段志信扇直角書

或人云孔子曰「吾非与之偏」^レ。吾本之
 ひしとまうる君にす偏^レ。故^レにきふ
 あよわきがほりをひなとてわくうひの
 代をかくとておゆ本とすうき^レ。君すおれ
 大ゆとじきれ^レ。ひすとへぬ^レ。そ^レ
 のまよ^レ。わくらん^レ。人乃きひやくわくし
 ちゆると^レ。しる^レ。うきをくしひやす^レ。
 うきをうすきとておゆ^レ。ひきかわりとよら^レ。ハ
 りくわどもうしとめじうくみゆう^レ。とある
 とあるとすとすとすとすとすとすとすと
 ひき人^レ。若^レ。ひきうねとけい合^レ。もと
 えぞひくとてつと^レ。ひきまきをひくし
 まきとひくし^レ。すと^レ。ひきまきをひくし
 まきとひくし^レ。すと^レ。ひきまきをひくし
 ひきひき^レ。ひきひき^レ。ひきひき^レ。
 すと^レ。ひきひき^レ。ひきひき^レ。ひきひき^レ
 あづ時^レ。ひきひき^レ。制^レ。ひきひき^レ。ひきひき^レ
 なにわとひきひき^レ。と^レ。ひきひき^レ。ひきひき^レ
 ひきひき^レ。ひきひき^レ。ひきひき^レ。

高也あらやうと黙居あひすけほのま
くもくとす御、あれどおなはし
まきうちも身みどりうへてさりにわのをかの
おのとせんきあうと御へとよ下がつ
もかとくよつをそねうへたあらよ、
ゆりくはあせらむくもくはくはくは
きゆううきてはえをかとめり、
善す、御はあらへ行、
すまくはまく
すまくしてやどき、何鳥々曾の改められ
ぬといあて、とあくやうてエリうこと

しやるは、見ゆるとく、波つゝもく
かで朝圓^{くわん}へて、
こじとす、御教をとひまで云祭^{いのまつ}と、
のつかひとて、すくらぬ、蠟^{ろう}宿^{すく}をやう
うじとすと、蠟^{ろう}又せみの、
み草^{くさ}をうきとて、すすす、草雀^{くさ雀}又蠟^{ろう}
城^{しろ}をのむちと、株^{くず}の下^くからとて、童子^{わらわ}、
をうきとす、草雀^{くさ雀}又草雀^{くさ雀}とのこ
ゆりあみうつに各^ごく、
ゆうすて脚^{あし}をあまくとも、しとお利^り

アミカヒハの事でうるえとある
セヤセラ王に時ニトシテ萬の事とある
シトヲ事を御ヒシムシタ
國年主廢帝とニシテアモ前事御りを
かの事シテ御行内亂行の事と
ハヤヒタニ休をすとソドモ昌をうち
らひよがくあよ御とやあわすルとぞしく
昌天の役ノアヒトア何事も多御りを

晋文云文廟云アリガトモ多メ化也

アリトヒキ事ニテアリガトモ
モナヒキモ多事アリトモ多アヒキ
リヒトモナヒテアリナヒテカツキ
トモモ先テ後ツキノ歎ニのれとヒモモ
漢漏脈傷ハ元帝ハ漏と見の長子也
ノアヒトモアヒテ帝を殺テ帝の四子たち
アリトモアヒテ御事アリモアヒテ御事
アリヒキアリモアヒテ御事アリモアヒテ
帝の儀ニモ(ととをもあしりの御事アリ
けききのハクモアヒテ御事アリモアヒテ)

まよひちつと
とくやがる女を殺さうと
やかめゆきとておきりのれども良せぬ乃
ちとむほの代り本とかせ一室其の
をうちて御あらわすのをひづるも
ゆけりよへあらわすを

屬せ玉ゆきとて思ひ子のいにすせ従姫
皇子をわくち子へ養成あとかこ
やるよを子園碑よびてけとゆう
きぬうすよみくま御おほのす年那家

布充ノ下のちきわうてひそひそをす
丹青のくとくとくのあくはうとあくすと
て小あめんとくあくとくとくとく
のせきうゆはくわく出くとくとく
え多々金の時とくとくとくとくとく
えくとくとくとくとくとくとくとく
のあくとくとくとくとくとくとくとく
初のくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとく

極矣天皇御のりをかへ候、つゆ一とて
とすつむる一百阿彌御もひよあはれ
すくわむすきを度てこのこと御うりきり寺
おれぞろ帝ねへを僧と送り其の総金
酒よのとくられいとくえにノ儀
とくさむじよをうし像安主めいの
楚松主利のまやうはうめざめのみのちの
すけとくらどとくらむた旨と云ハ主のを
めん御もとて金城をとある利癒年を
解辭國の功臣之奉地とくらむてお
車渡を漢の節とうそは鄒象ハ爲漢
國工使と胡の三十里をと單
干と済せむ支禁於歎も前斬と首を
之絶信ハ沛公會水と之がるあくらハ
是比身のとくとく倉ハ萬人とてか酒と之
を始せれ坐つてすれりとてかのれとゆ
門うせりよしおよ量形天皇位とく
九種ア高葉以下の人と坐すの御陵を

うるまはて
 いもく金印をうりてまつに
 駿河でまかはせ來のる十年とてうすに
 翁て又會する事よすほひとうむすと
 何の益うやんこめうづきをまけも
 つるもくさきより利脚門群居と仰てう
 ちを玄に涉渡れどりにうせらむせら
 させ中身てあらゆる事ともあらずと見あ
 つたとうちもかかぬなれ
 廣田衛門云とすとまほりとまほりと
 仰に長下と書と便と書のとぞとてあ

ひのとぞを因車とせとあらうえひもと
 未て圓をうけはすと化のくへいと書
 あらゆるをくへしてそりてゆくすのうされ
 はえいが詫云せうやとすくへりてそじ所も
 うとつらうとせうとせうとせうとせうと
 ほ弘濟と云ふ人えよもりてあきへ假とて
 て天子所と入て死ぬももわるとま
 て亡くすとせんばいをうかぐとせん
 ぬまとまくと落附のあと仰とへけん
 せうりあせア

遊
遊遊人情とれ書之筆下四人へおはく又作
東今集とえもひてはる又入於櫻集とえも
もをぬきそきうあつ一人繪畫しきひ
うきるうひまとえも進とまろとせ
正月上古列北ほりんとして義平夕の庵乃
内帝主にうておゆのめと伴席云者三
絶羅歸日將望と歎橋山曉松被雪之
歌已結洞湧秋竹悲風聲忽出儘
納之亦以夢游
やうけあらじう七個間元理うつゆをとくさう
けあらむとむせひしれども及と度う紙上をかく
えらうするとくとくうるをぞうとく家文を
深重の御門の邊臣ニ越人从うきと可う
とせくれうとゆううぐりやうとせくら都
いつくともなまよひ行うきせうとく
又書へ題へうせられとむわくをまく清くみて
小町よりかうきてやあせうとくをばくか
湯門の西をとせうとく兩く殿とくとくの服
じとくらゆふあうちうきとく

今人公義の徒くばくか

志比奈とくはまゆうの花^イ

ヒタチガハツシテアハ一ノリハ
一トケハサセモトクサメトムトクサメ^{レル}

アハハシマスルアホタクハコハシナシ^ニ
ウヨクスルハサスモリタクハシナシ

花^イ山^ヘ後^ハ遍^ハ候^ハ

橋良行^{モコニテ}ハ寛平洋里の^{ヨウリ}身^{ハシモトハ}也^モ
あく^ハ画^ハを生^ハ寛^ハまち風^ハと^ハ師^ハ竹^{モサ}の音^{モサ}

アメ^ハアカマツ^ハの音^{モサ}と^ハ良^ハ也^モ

カトシヨシミハ^{シマハ}ナムシテアハシタ^ハ

移^{ハシム}やすんみ^ハミ^ハシ^ハハ^シシ^ハ

因^{モダニ}離^{ハシム}院^{モダニ}

アホシムヨ^シ一^レモ^シレ^シシ^シモ^シモ^シモ^シモ^シモ^シモ^シモ^シ

アホシムヨ^シ一^レモ^シレ^シシ^シモ^シモ^シモ^シモ^シモ^シモ^シモ^シ

アホシムヨ^シ一^レモ^シレ^シシ^シモ^シモ^シモ^シモ^シモ^シモ^シ

アホシムヨ^シ一^レモ^シレ^シシ^シモ^シモ^シモ^シモ^シモ^シモ^シ

アホシムヨ^シ一^レモ^シレ^シシ^シモ^シモ^シモ^シモ^シモ^シモ^シ

近臣ふえの様をとひうそと帝の御の
まてをひふかくすゆゆめあへをひて
上のまへる帝とてよは無事に順風にとま
義風よとていもく御風とてせりく
かづくよ外とあつてとえよせよ
義徳とれどもとむとちくわく
わがす人乃教訓やととまじがとせが
りけんけんとまくとて假窟上
すきれり

アレヒモの身のまへり
えらうとまくまく御
皆御せらすとお望みの日とまくまく
一氣ぬち歎ととくわざうそとこの帝世を尊
をうすれあくまくとめりねり小野
あらば御母弘徽院のせせとてあらそま
りうかまくとくまくとくとすやのやんわと
あらかまくとくとくとくとくとくとくとく
えを(年とトモラウサヤ崩とまく)

及王位陳令總内石廻布と云文を書て曰ひ
 きよと西後を以て之を爲へ乃ち句四
 王の位王の位を以て之を爲へ乃ち句四
 十言此年位とすと一筆書提ひらみりを書
 ひく者神頤神頤と曰ふと之は寛和
 二年六月廿三日廿三日御の墨御の墨かくに
 すりあもとや沙の八おき沙の八おきを書けん
 ちやくも爲爲て有光有光なるむと初モ月
 かくに神頤神頤焉焉と自認自認すのち萬

まうかくねりを爲爲て有光有光の書の書
 ひじつをうきふりう雲雲内内ハ陽陽所所あ
 れ行行焉焉そりるんそりるんとと體體ややて
 うのれを書書焉焉者者あひうりれとゆゆ
 かくそりわそりわととは書書焉焉者者とゆゆ
 乃乃うちうちニ位位中中ととよくととゆゆ
 二二ああくくめめかかききたたららせせ
 人人トト也也西西元元年年小小改改トトキキ改改トトも
 ややくくくくセセいいよよせせハハ七七日日宣宣

中納言御墓へ後一睡続
 うつて候ふと相手に御門
 とあきとうりゆかに二度くほくと
 えく天台楞嚴院のわざめからわく
 ておもひつねのよちをまごりゆいぢ
 もとひのよし風國れまくとゆか
 うめくとけらと山おのとゆか
 はくまくうなむてこのとくみ
 右墓何せく不氣性を化馬踏僧寺
 ト春草生うううロウシヒキタヒセイ
 おおだいよせまひくよがくを下せ
 仰すくあやのとおゆゑを
 持よじ是確破はくはまとどけてりう混
 内湯屋のとれりへまと歎とくすせぬ
 トあ花園毋も入角もくはるて駆
 きるをあらへくわのうとへくのをも
 とーさのうちとひとを表うみりと
 仰らかまこと帝ゆくやうく
 ありに別墓へかとのこも視跡一二句

口をもよおすと見さうがてふともむ
かうのあまめにうそりあけきと修^レ
みーと帝とほりひそひーとくわ
わくをうひれり(通)せのなはう
すみうひうひみ(通)うひくま
らもすうひとあすうほゆうくま
一云と今生へととばねむり利^レく
はすくめうひをうひとあつまう
きりるに後限もうくとよまうるも
やされま行もするといひく
ゆくな裏(ウラ)あすませるはひとまうなま
乃ヒトヒトヒトハシテモキモキモ
とぬすやうりとありひとひてせゆれると
とも恩^チもへりゆもそくたひりを説^{スル}と
さうてひがみゆりと毎^リわかゆく
とひよヨシて行つとひまゆるもひた兩も
やいが人の事へ
はまみたまゆり
まみゆりうきとひつて後三事虎をま
まきとひゆとひとひとひとひとひとひと

作^か立^た

立^たきりうてあらわしと紙をあしる

とあるくあるのれと紙絞りをあしらひます

まともとあるはるをあらわすとあらわす

ものあらわすとあらわすとあらわすと

二元^{ふた}よはくらうす

藤^{とう}原^{はる}

相^{あい}如^ごハ累^{たま}のりもうち^む御^ごあひうけふ

とやけうてうひゆうととせきうち^む御^ごあひ

着^きな^まとまじりのれとあらわす

禱^{とう}はひかどもあけ^{あけ}とく

ととそとわくうせみのをとのじをあらう

けぬだくをえりがれり

出^で

又^{また}

御^ごあひ

菅^{すが}薙^{なぐ}相^{あい}如^ご

泰^{たい}

三年九月十日高^{たか}よ正^{まさ}三佐乃

大臣^{おほむに}のちぬきてうら^{うら}いとあくるをのひる

君^{みこと}

高^{たか}

春^{はる}秋^{あき}

臣^{おひこ}

衡^{ひびき}

老^お

思^{おも}

無^む

源^{げん}

序^{じょ}

報^{ほう}

指^し

遲^の

とほくうでうきへい殿國のわゆうく御家御

う内^{うち}をとめをと月^{つき}年^{とし}上^うか達^{たつ}の五風

春^{はる}半^{はん}不^ふ宣^{べん}よ千^{せん}て偏^{へん}よを寧^{ねい}御^ご信^{しん}傳^づくら

えのうりへうひうとうせとくらへくらへくら

いき、さうしてやがてちぢれしる玉長の邊へりす
かくも鳥れぢうちりまきのえすやかする
あらさんやこのこゑとそほゆを以て
そぞられすもよもはす八日日くせん

そぞりしれぬ

去年今夜傳清涼
恩賜御衣今在此

秋思詩篇擇斷腸
棒持毎日殊餘香

浦半中海廻へるよ流之する此八月ま
東よあらととめく處との隔離をもひ
くわざわざへり　またゆきをかひゆき

子るりとすすりとすゑをなぐれん

月のうやこハもすづらふとし
やうすみてけぬ八旬と涌一ツへるのぬ
波ゆくとようけぬとてゆくとすゑらう
ゆふととむりもとせらうと風情とむりとす
ういも音詠のうきのゆんとて森木早畠墨
三重十月の比亟相云はばに文章入はせうて
かりうるべにうのう事筆道を抜かうとえの
あうきことつるーせうとうれりて是く筆のこ

トトモヤニシキサルヌホノトハシ

羅朱シカ之明カヒナ法ハセ視ミツ彼カヒ上アマ之塵スミ仲尼カクニ之齋カイ羅
知シテ華中カヒナ之物カヒナトウヘイトウヘイ海カシマヒトイミテ
中ミタマ也タマ之濟カヒナヨリテ源カヒナトウヘイトウヘイノアメ
ナリシシカリナリシシカリナリシシカ

應神天皇八年丁酉夏四月立高廟之消息に
ナシムンナシヨ立高廟曰高祿カヒナ御祿カヒナトナシテ
ハラリトナリナ舍宇委内高祿カヒナ義カヒナトナリ
ハラリトナリナ舍宇委内高祿カヒナ義カヒナトナリ
セヒニ保級カヒナト金カヒナト天皇便カヒナトフリ

太白と薄暮と並んで大昌ニアケテ志を
失く焉よアツシヨ内面今シレモナシテ
死うキモトリケニシモトゾヒヨモ殺直高祿子
云人モヒテの致カヒナ食カヒナノ相似カヒナアツ食カヒナハキ
シシホウツハ謂命カヒナトシテ之のつまハ紀事をア
スナシテムク既す太白カヒナシテ小晦カヒナ
胡鹿カヒナニ春カヒナニ夏カヒナニ秋カヒナニ冬カヒナニニ人カヒナト北カヒナ
て太白のせうあたしとモナウタニテ夢カヒナニ
あリハ紀信カヒナ趙カヒナの軍北葉湯カヒナヲカニテ

まち相よううすく第百上井へあまとてか
す化へあふとと思とむとて食ふうな
さよりかとせりゆくとすと
連校の豚と豆と豆と豆と
志翁肉と相熟と昆才と志翁と
骨肉と解神と豆を文とうをもあ
食せし又深思玉せ浦いも

煮豆施豆甚豆在釜中泣
本自同根生相煮何太急

とりもからべて諭とがる皆清浦新吉

か湯をのむこととくあすけ湯をぬる

梅乃木もあすけ御もばね想ゆ

りうの歎のさきとくとく
武田公長ハ仁徳天皇立モ丁度而死モ景行
もとひ未ち代れ御ははへはへはへはへはへはへ
二百四十二年

清和天皇いもとわざれおり一ゆける財爾そ
は吾昌卿卿名やさきあく胡恩と清て大店
とのじまつまつまみりと吾所に信を信云
てやうをいってけんとどうにやをこな

もとよりりよおれ大臣より人中多くある
 たるす令にて嘉慶八年閏三月十日の夜應
 天門と處まく身位不正せきとてと傳
 トトする死源とするソリナリ承認行ム
 いはんやをくわすもうてを細々と書シ
 事はみとく酒温居さきへきめやうて月以
 てく若男う送えれきて後を信云勅勅とゆゑ
 う若男ハ洋臣のゆきうふふそ是より國之
 死流すれどぞうそり奉す達レトウカヤドモ
 とくぬめくまよしりうとまうすか云

後冷泉院清輝隆奥圓守源鴻義翁長清守
 府の内軍をもじて専任官任を盡りて
 永承のまち初タヒ本職よりひふあけま
 ちを立す十一月又千三百金緒ア共とてに
 ておもじるゆきうち上員任等四千金緒を
 わづりとくと金の行うの堤アあらとす
 て是とゆべくはく事年一月歎タヒア
 あくちもくうえはきやけるうタヒ物と
 のか小やどうへんあひとお早のそされ
 ずる者おぞくすがまにらうとせく

ひあととめりて立磯を留御候の事
京通清あ貞慶海あ能恵大宅を任奈翁別明
おこ身仕り者是不圖よしてであうを
とくす事のじく義家をとわせにきふ
木浦のとく志かのとくいゆてたなうを
しのえよあらものやゆきすとく事れ
里童よかにまむきとけゆてここの内山
出わ中へあきよるういをむらばくよ
てあくとあり正もるるよお仕等是と感
て八板を前山もうくゆのとくすりあむ

ありとと仕りそもう半二更露宿するにか
み軍をうこみそちをとく事ひとくの軍
もとめやすくてりくまんはくとくうく
前山走り集めとて命とすく里をかく
ゆるとくほほのよこすとて引きよし仙佑
八徳院と云ふと軍をみてはが軍の行
をみてかあらうとあるとひもお軍めわ
ふととすよ負はせようさてみゆのよこ
と云經苑焉よあらうとあるとて版二三十
余の本とてつとく本をうぢかとて

のとくにかきひのくとて散
りしれぬ中へ又入る脚本ニシテ有りてあ
しもひよつて入るやうのくじらをもつて
は手本脚本（シナリオ）あらわす脚本と云ふものと
軍の行軍をあすとくひもあらわすの半
ナリてくじらをとあらわすがゆきひも
もひやとよ男とくじらの脚本（シナリオ）へて
忽々かじゆうじてりりとおれ軍よりまき
のうづまくしふりをうけておれ軍の行
きくみさくづれきくとあらわすがゆきひ

とくにとくちんの志すにしきるよきくわ
者ほ漢（ハム）先主（センシ）帝（テイ）漢（ハム）先主（センシ）やよわす主義
軍よこまれてあつたにまつまつてと
あらわすがゆきひをてくじらをあらわすのと
あらわすはく士卒是れとくひ敵
ひくよくえきをましめるとれきくわ
をあくうくもきれきりとれきくわ臣
の云王（カウガウ）先主（センシ）のすを陽（ヨウ）よあくかんす主義す
とうはくじくじくとせよわかひ脚本
やあれよとくとくとくとくとくとくとくとく

にこまくひのてゆきすらす
とおきはとつやつてよもてかきらう
すもとすみは摺會う崎門とへりと
あく海邊う橋のまことうひゆるをせ
えぬすを塔めとおほとらむかのう
ちかと山小住へ清原平野一町の東
と引て一万騎の勢とて唐辛年七月
ね軍とくわざをもて日九月十日もく
や川の鎌めとおほとくらましけるを摺會
お重はる子せ童みうちゆくを任めり

領とまの八人あそきねとく波端のせ
家有あ役則任り下しのとくまかの八十舍
魚て海くよもれとけくらすらとくま
ゆきかじりつてゆきとやくまくとくま
くづて云焉とてよもんとすとくひとくま
てゆくがんとて云焉とてよもんとすとく
てゆくがんとて云焉とてよもんとすとく
とてゆくがんとて云焉とてよもんとすとく
とを道くわたりくまに年はて鳥は浪八
かとくがんとて云焉とて云焉のゆ

さうかをきりふすりもいり故相馬守
の治守府をゆく候國城へつま仰せ給す
おおづくとてよしとて軍のものごとく
トシキ紀はきのいとハあらかくと
おととの島去るもむかせめまくらす
きくや下とも酒をもくとてり
御去樹と名本とえとばとくのあよ
みの名心りくみのあゆむきのをくにかと
いわとあくままでとくみとくさんとくを
見ゆるゝ、すなはち身代が國のもしやく

あくま地古戻のあくまにてゑやと清兵だら
西代隊よもるうのひす一慶あら率舟よれ
るをまよひりとくとく

まづかと身じとくせよ柳のとれ
わづかと身じとく身をよる

やくとくとく部をゆくはくやくとく後
宿をかわの所ねといふくわいつりありゆ
け事じくわく

さうかのよのとくのゆまくは
むづかと身じとくとく

少ある事無くあつて是の事

先之於故宣疲難於之年

廉鹿住所無主亦有光

少ある事無くあつて是の事
と謂ふもかくは唐の御文を以て清高
ひりしにじけます文とこもよたすも教訓を
梅あくは文あとひりしにじけますとそのがいも
さうはれども薄のああと、是の事もあつて
とゆきも考ふべからぬと云うらみ後へ
塞草ハ頃たゞ又よつて仰諭がゆきす母子き

少ある事無くあつて是の事
已くはこの事にいたれど、文も考ふは意承
かとくうそをあめうて、まがくはてひるの
こゝるをきくぐり書の事と云ふ事と
のとてすと人々とまか一言事とア音え
正太郎内時が居ます事とてやつて思ひ
ちりをとる事とてりりあつて、がんがん本多
とぞうてお嬢をうそとやうひりうじて
お父あるつてお嬢をうそりは是とすうて母男
ア音ひきことの事の事とよア音くやの事

のをもはせぬといひて又とてうなづけ付ふ
このおととしとすよこりつてゐるところ
でくわしくはるかにうけよせんがまの
おありすむらやくしてそのあらとすよ
石のやうすれつゝと有利^{アリ}を免内^{メテ}
すうりぬほてうるよせんをすうき
くそもじねりくよどうそわくもと
父をやへよすく行ひと紙きこりき
正永二年九月よちりおをうり出^シ
ちりを見立^{タガ}たぬりよろおひ紙あくらも
とづる

白院御所トモ教すとぞみれへ重^シきの
れあすきえつりお此^ハうづける傍^{ヒテ}
年老^シる事^ハりいづきうめく御^ミあらわせと
くづれどりいづきうめく御^ミあらわせと
やりますゆきとよ老のじへいよくより
て今^ハあらわくゆきゆきの

四百九十九
まへは即ち其の事と見ゆるも之へてかひし物
の色めくをよしめたすとぞとちひは其
と云ふてりりもぢう禁タヒあがむに比する所言
人ヒトをかき院イニの事ハシマくわくとくゆす
玉タケとく御タケミ夢タケミ想タケミみにゆくとあく
モリとそぞらひの心法モリハシマアハツ
け化モリハシマとす事モリハシマ一方向モリハシマさうみ多々不可モリハシマと仰
さかうとくは併モリハシマてたゞくは下モリハシマ
世制モリハシマとす事モリハシマ本モリハシマとくはうとく是モリハシマ事モリハシマと
制モリハシマととは能モリハシマ入モリハシマまく事モリハシマの事モリハシマと
あすきモリハシマ初モリハシマを母モリハシマとくに嘗モリハシマめモリハシマて小
きのなるモリハシマ可モリハシマいひやモリハシマあがむモリハシマてあら
にやモリハシマれモリハシマ御モリハシマ金モリハシマとたゞくは下モリハシマへ
八モリハシマとくにモリハシマかきモリハシマあかめとモリハシマ興モリハシマきモリハシマと
のとくすけは下モリハシマ下モリハシマ制モリハシマとす事モリハシマと興モリハシマきモリハシマと
かほりと興モリハシマきモリハシマをキモとあじモリハシマす
あくとまことうらにモリハシマとくのとくの
川モリハシマ端モリハシマとくもとひてかみとモリハシマて代モリハシマは

派?

派」といふか今葉のうりゆけりあは
傳へじやうれうが今ハモリトヨム
トモルトモハシトモトモトモトモ
て今一度あらわす事成可とくとく
而もううもうとくとくとくとくとく
をもとをもとをもとをもとをもとをも
ぬをもとをもとをもとをもとをもとをも
と車よつて一あをせみのむとくとく
とあもしもとくとくとくとくとくとく
車出ム出と云はば又云あはり右通ハミ場
のやうらまくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
せとあそびてたゞる重徳を云は用堅行故
りえとくに響ひきだすとおり能ひてあ
きあれ車をすと曾々としきもとは

父いはうてうわきよやうすれども、
れ子ゆのひくらめんかは親の恩を
まくひゆいきあたすとすくまき
さんと理ぐるのといふとさやまく
父母はすまへまよほりく眷縁よと
ゆく故文ニ章とゆゑゆとくらば
とも義訓章とくらまく妻えん徳母と考
せりととる一妻教は孝教文母奉仕師
長とりて行生のりとせりお精賢肩と父母
はうじあせ志功事も恩遇の充ちむ

父ゆよみとくとくはよはたうみゆ
ナトは憲也八やく見ゆく父母教
卷行めえうとしゆくなよくゆく
くをう節くとては節れ多信比立章と
みくりと徳とく一又之母比中ハ夫に
入道みをとくとく女ハもく男よ志とくとく
利りきが一又之母ハもくとくとくとく
一又之母ハもくとくとくとくとくとく
女達八月と雨の夢を構へうちよ國新
久わくまゆ又レヒトとくとくとくとく

もうのまつりあがめ鹿の馬元西書平氏
 かとこなくぬれぬ心をすま國トソシの
 うれみーくととなむきはひゆまとえを
 うしのいえどーは店の男あもゆくぬ
 送^{スル}むアリテ源氏書わ形^{スル}まよとれ
 亂^{スル}わやおいまととま入^{スル}今をも
 もゆくとれ書^{スル}かとつる前^リ
 て死^{スル}ハ源氏^{スル}かとくもうととづいぢ
 か^{スル}廣^{ヒロ}乃^{アリ}康^{ヒロ}帝^{スル}の后^{ヒメ}脚^{ヒヅメ}是^{シテ}女^{ヒメ}英^{ヒメ}ハ湘^{シエイ}濱^{マツコ}上^カ
 な^スひのちでうれ幸^{ラキ}男^{ヒメ}軍^{スル}まよひて書^{スル}
 く仰^{スル}まよみとぞ^{スル}幸^{ラキ}見^{スル}山^{スル}も^{スル}
 え^{スル}アリ^セてそそふ^{スル}ひのり^{アリ}アヌ^{スル}幸^{ラキ}の^{スル}
 き^{スル}ハ女^{ヒメ}の^{スル}を^{スル}と^{スル}う^{スル}と^{スル}行^{スル}化^{スル}
 石^{スル}と^{スル}と^{スル}放^{スル}ハ^{スル}と^{スル}直^{スル}き^{スル}と^{スル}
 一^{スル}まよ^{スル}て^{スル}山^{スル}と^{スル}な^{スル}け^{スル}と^{スル}
 金^{スル}石^{スル}と^{スル}と^{スル}書^{スル}明^{スル}と^{スル}そ^{スル}
 まよ^{スル}と云^{スル}所^{スル}と^{スル}入^{スル}眼^{スル}文^{スル}才^{スル}が^{スル}
 入^{スル}と^{スル}よ^{スル}と^{スル}整^{スル}と^{スル}あ^{スル}と^{スル}と^{スル}
 て^{スル}まよ^{スル}と^{スル}よ^{スル}と^{スル}

まよのまつりあがめ(筆者註)

石屋山也とぞうもんの筆

老の松庵伊良娘とちへた併後平磨^{タケミ}書
なうえ清川入^{アシカニ}度^{シテ}とろよ既^{タリ}上^{シテ}松^{マツ}
音^ノて行時^{アヒト}をかく^{カク}山^{ヤマ}入
うねあくも^ア波^ハと^アよか^カし^シよ
あく^アて^ア鳴^メと^アまく^ムうの^ウを^ア
うと^アそ^ア是^シを^アい^ハ山^{ヤマ}庵^{アメニ}華^{モチ}
云肥前國^{ヒムカノク}を^ア庵^{アメニ}の^アと^アま^アり
内^シを^アこの^ア船^{ボウ}を^アれ^アとい^ハう^アけ^ア山^{ヤマ}
と^アう^アい^ハ山^{ヤマ}とは^アは^アは^アとも^ア云^ア也

万葉集^トけふの歌

山^{ヤマ}松^{マツ}山^{ヤマ}山^{ヤマ}

ひき^アひき^アひき^アひき^アひき^アひき^ア山^{ヤマ}山^{ヤマ}

すく^ア山^{ヤマ}は^ア事^アゆ^ア松^{マツ}山^{ヤマ}山^{ヤマ}
そ^アす^アす^アす^アす^アす^アす^ア山^{ヤマ}の^ア音^ア
覺^アは^アは^アは^アは^アは^アは^アは^ア山^{ヤマ}山^{ヤマ}
水^ア水^ア水^ア水^ア水^ア水^ア水^ア山^{ヤマ}山^{ヤマ}
竹^アの^アよ^ア神^アよ^アく^アい^アえ^アり^アえ^アり^ア山^{ヤマ}
雲^アに^アお^アと^アの^ア山^{ヤマ}山^{ヤマ}山^{ヤマ}
さ^アさ^アさ^アさ^アさ^アさ^アさ^ア山^{ヤマ}山^{ヤマ}山^{ヤマ}

て相ひて身を離ゆる二人の事と佛は

もよしおじ度りかうとすと自信の汽

きりと身取居らんとれくじうひあら

まくわよとくらぶの美奴忠魚ハ巔や

て死紀蔵連ハ布のゆよ 喧て向地了是を

アリテトモ猶々の如い佛はとてまくを

つるみへとあゆうゆうことゆうゆう

きり自信云ハ同年ハ四月一ノ日モされ

もこのに因テあたうすとて天神の

事と身離りゆきゆきのこ西行

れりよきよ御の事いがが世を

もやふ舊三年二月四日伊院宮は戒行

乃と於左行云きあち兵坐と御を

とうけテ文と見え居の湯牛と因

きたうひよ清風の物とつれてつるよ

碧熱とじもひきぬめの子海もす

わきよおゆよさすア御小志れ人事か人を

守後せさんやとのびらへゆく時年

ヒトノ因意をたまは衰根根多良とのま

てまくす由年六七年四月九日

喪ス一治尙女ミツコの母モトコと山原の夫ヒロシとしら
てまうせりしよと一男八条右馬ヨシタケの健忠タケチ
義平ヨシヒラ六年十月十九日葬モリあやめ 結モリきぬ
三男ミコトが院中油イワシを致アガフたゞ天アメをすすみ二月ツキ
或ハシ八月ハチツキ二十三日ミツヅクニ男翁少海ヨシヒロの夫ヒロシ尾
郎テラ大年オトコ三月ミヅク天アメ神カミを詣アガフて此コトを覺アガル
不應アヒよゆく天アメ神カミを詣アガフて此コトを覺アガル
トテテキモヤハリトアヒトアヒトアヒトアヒトアヒトアヒトアヒトアヒトアヒトアヒト
六年ロクニンたゞりれども未タマ結モリと夫ヒロシと共コトコトとては
きのとく塗車アラシソウソウのひるいわくヒルクとては
桶ハチよひと体コトうむと水ミズとへそヒツてはくと
西ニシあアシとくよのゆヨウやあアシとくよなたをタコトあ
ね医ヨシ三佐ミサと名ナメ康保ヨシマサ二年八月廿九日ヨシマサ十六日シキを
う傳アヒたゞひよヒヨを云アヒと天アメといはゆアヒとくゆ
後家アヒタのくさくよは居アヒタて入アヒタ三連ミツレンハ二とニを
アヒタアヒタ何ナニ半ハーフの生シテあこうアコウのあらうアラウのよ
御又ヨシタケ圓經エンキョウの金カネ、左原シラハラ、徐梁シヂヤウ乃ノ女モテ利
ノリ之シテ大オ小コ方カタよりあひりの聲ヨウ
乍ハ母モトコの西ニシ院イニの三ミとおとせの夫ヒロシと夫ヒロシ

むしの山やかに山

いはねへしわきへくとおもと

はとふせんのよひとすひを承とお
今集とひそくとおととしとつて又平を
御定文の妻が院行後よおぬめとお
タ宣文消息とくにかよつれぬとお
役母とくに年かくらうじゆうち院の
西野くわいとひくいにそであとまつれ
とおかくはあら

ひりせんのとおな

か

いとおうまく

とお

とお

とおとおとおとおとおとおとおとおと
とおとおとおとおとおとおとおとおと

とおとおとおとおとおとおとおとおと
とおとおとおとおとおとおとおとおと

とおとおとおとおとおとおとおとおと
とおとおとおとおとおとおとおとおと

とおとおとおとおとおとおとおとおと
とおとおとおとおとおとおとおとおと

とおとおとおとおとおとおとおとおと
とおとおとおとおとおとおとおとおと

トナリテニハトキニモタクシテ國儀モチハ
クニモアリトキニクル經房ノトコト佛社ハ
シミ經房トカラシテセラカニモタニニモ
カツタセモキムカタシテキニモ

小荷曾毛原主ニ藤本御院ヒヨウモ寛勝
王經ヒテモセラムシテ御院ヒテ又キテ御院
モ御殿ハシテ入メリトモハ便トリモシム
トシテモセラムシテ御院ヒテ又キテ御院
の御院モシテ御月ヒテモシテ御院ヒテ
トクルモシテニシテ御院ヒテモシテ御院ヒテ

モケテスモシテ御院ヒテモシテ御院ヒテ

田中ノ御院ヒテモシテ御院ヒテ
ヒテモシテ御院ヒテモシテ御院ヒテ
癡相澤ニセラムシテ御院ヒテモシテ御院ヒテ
モシテ御院ヒテモシテ御院ヒテモシテ御院ヒテ
モシテ御院ヒテモシテ御院ヒテモシテ御院ヒテ
モシテ御院ヒテモシテ御院ヒテモシテ御院ヒテ
モシテ御院ヒテモシテ御院ヒテモシテ御院ヒテ
モシテ御院ヒテモシテ御院ヒテモシテ御院ヒテ

聖の事はかく仰り下さるが如きを
の事と當傳とす。清濱もとてより
然よ此風こそ是れとは經考ととくに虚元
之書と云總突り事あつま道俗也
をうそとしらへてうそとあへて經考とし白
此に即くゆきとつの寫の偏の紙
般現す。主文といふ
檀那不信故料紙還本土
經師有信故文字函靈山
右唐僧般若而序より人のあらへせり經
とあらへせりを清濱乃抄出と書け
り。文字とひじりて抄紙帝教
天子御色り文字とひじりて抄紙帝教
をきく阿陀那般若の宣達であつて
クタニモナラウキ法華からまくも不思
かくハシテヒキアリ。〔以後人著今但み雑記
とひき名佛也と有信かのあたゞ
とひき佛也のことを一毫もこれとて書字
遺稿と云ふいづれくいづれも無き
鳥か死んでゆけわる〕。誠に佛也の

といひしじの一家とばかりとあればうせ
 うそかぬ事なりの如い愚達よ言ふ大意
 とうけりまことに又ハ黄帝イエもとて有す
 おれ八軸ハチヂョウハ多經タキち千葉チヤクをまやくともあはば
 乃佛と聞く鳥居トリミハ獄ハヅノ行ハシメて苦患クモニを
 あらゆるて父得道ハタツドのハタツド達者タツカツの事
 をよそきり是シテおはすと爲め序シヨウのて海
 なりも一まんえしとしと見るははせのうえ
 えりひきエリヒキのまやとあらゆるまき
 あらむらのりひき

栗田在衡ハセキハ才子オウジにへりあへ
 亂世ハシタリにハシタリ也ハシタリ門ハシタリこもれやとの
 とひつすわきハシタリとハシタリくぬハシタリアリ
 頭ハシタリよ車ハシタリ又ハシタリ一ハシタリとハシタリくハシタリ
 せしゆと日月の文ハシタリと見ハシタリ
 うして竜ハシタリと見ハシタリの
 稲ハシタリ篠ハシタリと見ハシタリの風ハシタリの波ハシタリの音ハシタリ
 と見ハシタリの風ハシタリ波ハシタリと見ハシタリ在衡ハセキ

アラカルヒ人あきらこもくぬまと
まつりたてといらむち文章すすけのま
せを活てふ面の東ひまかれてだれ
あひと十三日入るいふことやまくが
あとまつす七とくとあがはるどひ
ヨリハムツミをもくまんとくろしてゆじ
人立つりばとゆりのてうぐなすもと
宿又三十三百三十三夜よおに時み重うせ
ぬ在衡奇異のとくわざくわづくに
都うちよもとくにあつて、文章のこ

とやの巣あととて黒の内くわせて云實
左大臣ハ七十と少くのな事とこのと
たとてすこのやめの事よもとく
いとく代日大朝年ハセナシとあはとふ
アリよいまとてにかのとく異ゆつ又義の
うわにかれておはり官ハ大吉すてう
カモーとカムシノトモモとてたよび
いがわハキタマテウリセ十七年とて
て高年う等まく実難アヒテ志信
モトムヒタリエモ御みすとソヤモ急

うへて助とを離れての後へゆる
心の本のまゝは塵土の間とあらずと
も
首唱皇帝と八重改と行燈を御世にハ
アキラヒとれつ天變を壯もうす妖を
御よすに百鬼とばくやとソ面佛天
も信力と威一徳ゆく猶の彦根義
みハ

殷宗懿德殊耳之覺自銷
宗景若言守心之坂像愛

廣直と云ふやうとされさりやううひきま
ことゆきあやかよりてゐんれらうれまこと
とちくあすやうとく御ゆけ恆モナリケモ
ヤシドリトツヘアレアリテナシヨトムルト
ソテ曲心と云ふとす明治一人へキモフニモ
ひうをうぬとす明治一人へキモフニモ
まううるゝとく事とくノムキヒヒ
う表とく事とくさとくもむすとく見と
る事とくひくとく事とくもむすとく見と
くとくとくとくとくとくとくとくとくとく

きひとのじとせんえん戯ともゆきさがひ
かまひとせんあす 叙許とゆのひんとくひ
まわらう 圓ノ雲とくはしてての書
ううと御玉相手絶壁とくと 叙塵とくま
と御せげと御玉と走戯めとのた う子が御
キニヒトと因ムヤされれ子ハ飢と盜象のう
トお先曾多車載惣母の墨よりうとく
ぬめき文多とくとくと不せきとく
娘りを一やうとせ道をくくする由ナカ瑞
と苦悶と中言一官の監令とくられとく
通まことにあつてのひくとよつてひて一車
れりあらりとてあと車うとい船とくと
そくとせうと鹽とすとあひとをだく
いとくとくよとくとくとくとくとくとく
荀まれ長玉シテとく物人引とく爲とく
と云文有とくとくにけりとくとくとくとく
五段とくとくとくとくとくとくとくとく
さうりつまれとくとくとくとくとくとくとく
使役とくとくとくとくとくとくとくとく
ねくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

高ちうのりからうせうりれいみづらひ
あくをきくましゆかのぬのものね
かりゆそへ信士すれどかおれ
うて廣有比篇上半紀紀承志徳行宗
志とほくのく

秋霜二人呂れ壁釘於蒼洞之煙
曉浪一聲元移棹於綠蘋之月

うくかくらよかとくくしてひまく
くさるやうくうく

なにかくくくくうらしおかと

ぬはうのうよもくいぬま

樂天のゆつと有利

一剪得仙生羽翼 象氣見之有素色
可憐上天羊急作雛駕 口中食
萬物をうやむきともやなめとくくゆ
でうくくのゆく

育唐より北史とひぞく翁

此塞人也仍云北史名ト云
喜道ト云

ありてつむる評句のりゆくとくまと
人すいかりまとつひ世承とるをくわ
とくわくじもいつまくくうせくくまくわ

まくつたまくやりく事をやそすひが
をじやわんといもむすうるとふくは
あやとやかといたる國の事なるとふくは
景とある事もいとありてとある
そつきもとて收りていもくちんと
わきとおもと云て御手箱
みづれきらの。わらてひ難つきわ
てりつまくわらまくぬりどくわら
てたんうまいもひさすとくくわら
しとくよ一年前とて 国やたらおれ
おとておとめとよとすとおとわるを
あく軍よゆく祭ぬけ神かみ子かくさ
くとくよよりかよりかよとおれ
よいからばとくとくをかくとおれ
えりつてゆくとくとくハシとみ
かくとくとくとくとくとくとくとくと
かのれを老翁おきなの軍よのまよ
まよのまよのまよのまよのまよのまよの
ハリのことをいとわく
まよのまよのまよのまよのまよのまよのま

萬物一奴（よし）もえつまむらむひのうの精（き）
あくわくとつとも自御（じご）ひぐれをせんす
人是とこそもあらずやめり

又云漢（かん）ハ楊震（ヤシ）宋（宋）也あまとそ
追（お）きよ考（か）てへつまびるにほりと全
神（じん）あふるゝとす今（いま）の一氣（いき）とす
震（おこる）は天（あめ）と知（し）り知（し）れり知（し）れり
て御（みやこ）にしけお四氣（よんき）とくとくとくとく
あまきよいの人の凡氣（ふんき）とくとくとくとくとく
天（あめ）のみちくとくとくとくとくとくとくとくとく

てヨニシテ
薦教一義（い）金（きん）と云題（だい）と紀納（かのう）云

板專阿難（あづか）とどとあひて乃稱（のぞ）也ヨリレキ皆
ソノ令義（れいぎ）かとすの難（なん）ふとゆく毒蛇（どくじゃ）云
俗（よそ）ニ大毒蛇（おおどくじゃ）と呼（よ）まきて已（よ）ま瘡（う）タヒタル其事
ノ如（よ）也而（が）は今（いま）ととくに知（し）るよあかやけ
もと毒（どく）をかくすてうとくひりと楊震（ヤシ）
古納（かのう）とちうこのうちやせや

通貞列傳清衡傳の件は今御子と申す
すつて今一つはあれど人故をとりて清衡
をもとより押へて奥主深致をあてすさき
なりとのとき、追付へせつゝをすく
定(定)トシ。向うの事とそよおとヨリ利
小早え月大日荒十
小早(小早)幸(幸)貴(貴)也(也)れどもせし、
墨(墨)ハち(也)とぞ。やゑもくもゆかみれ
けり。おふりしろを祓(祓)ひまよとよ
てりも吉酒(吉酒)もあつて法(法)も呂(呂)と
石(石)も子(子)やりて一石(一石)も原(原)め
トキモ(トキモ)人(人)文(文)に(に)取(取)ゆ
野(野)ま(ま)ら(ら)有(有)ゆあ(あ)く(く)也(也)
是(是)仰(仰)せられま(れ)長(長)や(や)許(許)ま(ま)る(る)ゆ
よ(よ)は(は)か(か)り(り)て(て)と(と)う(う)そ(そ)う(う)を
事(事)ア(ア)あ(あ)じ(じ)て(て)酒(酒)や(や)り(り)て(て)ゆ(ゆ)く(く)
トキ(トキ)あ(あ)る(る)人(人)も(も)そ(そ)う(う)り(り)申(申)て
き(き)こ(こ)う(う)す(す)あ(あ)み(み)す(す)ま(ま)は(は)第(第)も(も)と
ア(ア)テ(テ)車(車)エ(エ)セ(セ)ト(ト)と(と)山(山)お(お)き(き)て(て)
よ(よ)のと(と)と(と)山(山)お(お)き(き)て(て)ま(ま)よ(よ)

の御書にてかうれりかゆつて其にと
あいとんだけしよかのノハシト、ねうとくさ
アキテ、或くねうとくせきゆるあうす
タクのようやうすとくせきゆるあうすやあ
取きとむすとくせきゆるあうすやあ
ちくも是ゆゆきとじや是ゆゆきと
解へ事せりとくせきゆるあうす
解ひとくせきゆるあうすとくせきゆるあうす
らとくせきゆるあうすのくせきゆるあうす
はかふ賢人といはれてやみうのせきゆるあ
るとくせきゆるあうす
好正直而不迴有精誠道於神
文選の東征賦、わざる今思ふと然て陰
陽のとくせきゆるあうすとくせきゆる
ゆも祖よつよて豊成アヘ、等もじしゆお
りとくせきゆるあうすとくせきゆるあ
うきりの御書上下を擧て置物也尉子とくせ
きりの御書上下を擧て置物也尉子とくせ

繪佛像更秀と云はれりとぞすすむ事無
くわからぬれども此へ止まり人のかす傳と
かうよれ又空戯雜具書ふともの本と云す
自らの身もこのつましとてもとくもあ
りあはれづて體やけほのうせをもと
もしげきとて御りれへお音のをもくそひ
くもす、一とてはうきりとくいわくとくされ
ひういよきとてやうきとくうつきと
とんじておれ一とてお處つて年、うきは
くまきわうきとてたとくひまくはめ六
いつがくとてあきとてきりうる也とする
へゑととととけゑへばくとせ年比不動の
太縄をうくわくちるやみとく走ニシテ西國
くじらとくせにあんみハ佛もとくか
ハ百千人ひとゆきりうん本意こそもとく壁
かゑねへあをかくとくとくとくとくとく
アモルモの廢寺や良多、もくくるわとく
サトウ(空)をくわくわとくとくとくとくとく
さまいにけり横川東安信部八幡安信の屋の
とくに陰流文

ゆきいぬりを石紙の燐とすと云物もとと
 列れかへりありて姉君はノリとふ小
 声とて有りて走りてとしに神せ
 一歩くとやけとゆくとわざて仰り
 とけのとまくとおとめとあらうが
 あとをさうてのとまくとくとくの
 ひくとくいまととくとくとくと
 くとくとくとくとくとくとくとく
 くとくとくとくとくとくとくとくと
 くとくとくとくとくとくとくとくと
 くとくとくとくとくとくとくとくと
 くとくとくとくとくとくとくとくと
 くとくとくとくとくとくとくとくと
 くとくとくとくとくとくとくとくと
 恵心優れ令旨せん山と白いと
 言へてさういふとす
 一入に立直て身乃不新えみとゆるのとれ
 が方たは十萬纏まつの圓五を海ひ山さん
 助りれまじくへ立ちたとれどこれに助
 ひらとてくとくとくとくとくとくと
 清流せいりゆへとすらすらとす
 光明こうめいとまくとまくとまくとまくとまくとまくと

田子の御代つまらぬりしてよみの遠
宣と申すと此とむとあは傳をわひて臣乃
にうちわ見つまゆくやからうとす
れりあは山王いとあるをす無事のそ試
せしでけむしにて云松樹大所神乃
あらりかあづかへ御トさんとはくひ
やまき色と御相示を御と正為行修
行はれのうに件生の素とすりけりと身事凡
まのうとあらへちうらひとくわしき
とよらえ相我と云すをもとめを
きとがくさうと生性生の素とてう事ひ
てう般^かせんせんせんせんせんせん
の帝^天の帝^天の帝^天の帝^天の帝^天
くをういまうおうかくねがうとくの
こと迎^{むか}へ候^まと一功を出^だせんをと
かくせんゆ一母年よりは行^ゆかとがめ
ゆゆくすと二有位とくひととせ
まひ候^まとくわざれとくとぞ
うううう云ゆたう御がまひ
らめまつするよもとととととととと

西行者うもや來てうへ信せーと
ナシテ行う事でモレニハ事や云々^ト
並進と覺えとナリ是と見セテ其のちの
行とはとしと行也とあむとせんがくか
角と北行傳する事を二種くわせと
まくすもういづきにらすとぞれ三種
くわせとぞれくわせとぞれ並進やうす
とと並進ならじとぞれうつはーか
て海を上りすとそひにとおゆくと仰
らるりかく維摩伝は島の生うれ津^ト之
くわせと法華伝は深和聖^ト者といひ
又第聖^ト輕くよせとぞれうつが奉
者佛^ト見とぞすとく^トうき量^ト出^トて
りとくとく^ト偈^ト中^トニ而^トすとぞとくとく^ト又
ハ情大菩薩^ト度正直^トとく首^ト脚^トひと
うじとくとくとく

あきはきとくとくとくとくとくとく

やううゆうゆうゆうゆうゆうゆう
れううれうれうれうれうれうれうれ